

第1回 観光・MICE 推進プログラムの改定に係る有識者会議 議事概要

■日時

令和7年7月18日(金) 9時30分から12時まで

■開催場所

アクロス福岡 606 会議室

■出席者（オンラインを含む。）

- ・山下 真輝 （株式会社 JTB 総合研究所 研究理事）
- ・原 忠之 （セントラルフロリダ大学 テニユア付准教授）
- ・西本 恵子 （立命館大学大学院 教授）
- ・竹中 良孝 （福岡観光コンベンションビューロー 専務理事）
- ・豊福 辰也 （福岡市ホテル旅館協会 会長）

■量から質への更なる転換

○熊本や長崎で利便性の高い場所に充実した機能を持つ大規模 MICE 施設を設置している。

九州のゲートウェイ都市機能強化に取り組むならば、更なる MICE 誘致が必要。

○仁川空港を経由して欧米豪が来訪するケースもある。福岡空港は羽田空港に次いで便数が多いため、欧米豪の誘客もできると思う。空港そのものをどう活用するかが大事。

■国際会議の開催に係る大学への支援など

○アメリカは、国際学会の開催件数が世界一だったが、今後5年間は、政権の影響で研究者を集められない状況。アメリカで開催されていた国際学会の誘致に向け、シンガポールや韓国が動いているが、観光面で深みが無く、日本は誘致できるチャンスである。

また、福岡市はマリンメッセなどの稼働率が高く、週末はコンサートで会場が埋まってしまい会議が開催できない。今回、試験的に福岡市と札幌市の大学を会場とした国際会議を実施したが大成功だった。大学を会場とした国際会議の開催ができれば更なる誘致ができる。

○日本は空前絶後の大人気であり、国際会議を通じて日本に行きたいと言う研究者は多いが、国際会議を主催できるノウハウのある研究者が不足し、開催ができていない。主催者になりうる研究者への伴走支援が求められる。

○MICE の中で Convention は助成金の活用などによって行政が支援しやすいセクターである。福岡市が MICE 開催を通じて何を成し遂げたいかを明らかにし、その実現に向けた主催者への伴走支援を FCVB が行うことで、福岡市が目指す施策の方向性に沿う動きに誘導できる。

■市民がおすすめできる昼間の観光の充実

- 日本は文化財を守ろうとする意識が強いが、フランスでは文化財を活用して稼ぎ、補修費用に充てている。文化財の活用ができれば、昼間の観光への対応にも繋がると感じる。
- 京都では、京都大学に来訪する海外の研究者が観光コンテンツを英語で発信することで、よりコンテンツが充実していくサイクルがある。福岡ではこのサイクルが始まっていない。
- 来てほしいと思う層のインバウンドに観光コンテンツを英語で発信してもらう仕掛けを作ると良い。一般消費者が情報発信できる話題作り、場づくりをDMOがやっていくと良い。

■観光関連産業の賃金上昇に向けた稼ぐ力の向上支援

- アメリカでは、宿泊業は20%の売り上げの増加で、各個人の年収を50%増加できる。そこを意識した支援ができれば、全国的に見ても先進的な素晴らしい取組みになる。
- 宿泊業では、賃金だけではなく、お客様からいただく感謝など、やりがいや達成感に重きを置いている者も多い。キャリアパスの最後に到達するステージを示すことも非常に重要であり、賃金だけでなくやりがいなども含め、総合的に発信できると良い。
- 客室稼働率が高くなっており、部屋数がもっと必要と感じる。

■観光客の来訪に対する市民満足度の向上

- アメリカでは、DMOが普段から地域住民と継続的に対話をしており、観光産業の重要性を伝えている。フロリダ州では日本の人口以上の観光客が来ているが、市民の不満はほとんどない。DMOが市民向けのプロモーションを行うことが必要。また、観光の目的を「地域住民の生活の質の向上」とすることで、観光を自分にも関係があると思ってもらえるよう工夫している。
- ホテル事業者としては、コロナ禍で苦勞したため、オーバーツーリズムという言葉を使わないようにしている。市民満足度の向上に向け、観光効果などの情報発信がもっと必要だと感じる。
- 他都市で公衆トイレを使おうとしたところ「宿泊税が使われています」との記載があった。市民が最も必要とするところに用途を見せていくという手段も必要。